

追悼

名誉会員 小島郁生先生のご逝去を
悼む

松川正樹



本学会名誉会員の小島郁生先生（国立科学博物館名誉館員）が、2015年（平成27年）9月19日に心臓疾患でご逝去されました。享年85歳でした。

私は、ご家族からこの訃報を知らされ驚愕しました。先生の死など全く予期していなかったからです。8月末に先生の研究の集大成となる宮古層群産アンモナイトの論文の修正原稿を頂き、9月第1週に先生と電話で打ち合わせし、私は米国に出張しました。その後、先生は別の共同論文の原稿の件で、留守中の私に手紙を出され、20日に帰国した私はその手紙を受け取り、論文原稿を推敲し、23日に完成させ、ご自宅に電話をしたとき予期せぬ知らせを受けました。先生は、私の帰国が予定より2、3日延びることをご家族に話していたので、ご家族から私への連絡が遅れたようです。先生のご逝去を知った今でも電話をすると先生が出てくるような気がして、先生の死をなかなか受け入れられない状況です。先生が突然お亡くなりになった同時刻の米国Bay Areaでの夜、私は共同研究者のDr. Jim Haggartとの雑談中、アンモナイト研究者は長寿の人が多く、小島先生もそのお一人と話しておりました。

小島先生を偲ぶ記事に関しては、既に、地質学雑誌に

掲載させて頂きましたので、本稿では、平成7年6月に大阪新聞に掲載された「終わりになき残照『海軍兵学校』の戦後」の10回にわたり連載された先生の自分史、そして、執筆を予定し目次まで完成された先生の自分史を辿り、その時々先生が遺された教え（小島語録）をご紹介します。先生のご逝去に捧げたいと思います。

先生は、1929年（昭和4年）11月15日に、北九州市小倉の郊外の呼野で生まれました。御尊父がセメント会社の採鉱技師をしていたことから、石灰岩採掘場やセメント工場のある所をご家族で転々としていました。子どもの頃から地質に馴染んでいたと思われます。中学の時は、返子開成に通い、3年次の途中まで在籍しましたが、昭和20年には福岡県飯塚に転居し、海軍兵学校の受験結果を待つ期間は旧制嘉徳中学に転校し、事実上は勤労動員で炭鉱の露天掘りで石炭を掘っていました。この作業で、地学を自然に学んだと伺いました。海軍兵学校予備生徒として終戦を迎え、終戦後は嘉徳中学4年に復学し、その後旧制福岡高等学校理科甲類に進学し、昭和24年に九州大学理学部地質学科に入学しました。終戦後の人々の変わり方や価値観に対する疑問から自然の真理を究明する事に携わりたいとの思いと、御尊父の職業（鉱業）の親近感からとのことでした。地質学科1年の終了時に肋膜炎で2年間の入院生活を余儀なくされました。『「ひびのに入った茶碗」を使うように身体を大事に使いなさい」との主治医からの話に、地質屋としては致命的な宣告に聞こえ、失意のどん底に落とされた気分を味わいました。先生語録の「野外の嫌いな地質屋でも研究することはある」とはこの失意から得られたのかもしれませんが。この療養生活では、近所の野球場から聞こえてくるノンプロ野球のアナウンス嬢が告げていた日鉄二瀬のオーダーの濃人、寺田、今久留主は、後にプロ野球で活躍した選手です。日鉄二瀬は、無名選手を育ててはプロに送り出し一流にしていたのです。先生語録の「地に埋もれた石を拾い出し宝石のように磨き上げる」は、日鉄二瀬の濃人監督が地方の選手を見だし、その才能を見だし、プロに送り込んだ心境に通じ、この療養生活で学んだのです。2年間の療養生活を終え、昭和27年4月に旧制大学の2年に復学し、昭和29年同学科を卒業されました。復学後は、旧制理学部でたった一人の学生として過ごされました。松本達郎教授の地史学は、たった一人で受けた授業を通して松本教授の層序学講座を卒論として選ぶきっかけになりました。まさに、先生語録の「若いときに優れた師に巡り会う」ことになったのです。昭和28年4月からアンモナイト *Reesidites minimus* の個体発生を卒論として研究しました。この研究は、九州大学大学院修士課程（昭和29年4月進学）、博士課程（昭和31年4月進学）を通して、そして地質学層序学講座の助手採用（昭和31年6月）後も続けられ、アンモナイトの相

対成長や渦線成長の解析の研究に発展させ、*Reesidites minimus*の論文は古生物学会報告記事から論文として掲載され、日本古生物学会論文賞の第1回目の受賞論文となりました。先生語録の「研究しながら勉強する」、「開発能力」、「初学者の研究戦略」です。古生物の分類は経験を要するので、経験の乏しい初学者はこのハンディを乗り越える手段として成長解析の研究が有効であるとの考えは、かつて、故氏家宏先生からも伺ったことが有り、お二人の先生が同様の研究戦略を立てておられたことに驚かされたことがありました。

昭和32年～33年に松本教授は、カリフォルニアの上部白亜系のアンモナイトを研究するため、スタンフォード大学に招かれ、バキュリテス科アンモナイトが対比・地質時代判定に極めて有効であることを究明され、日本との対比を試みます。しかし、当時、日本産のバキュリテス類は1種が記載されているだけでした。そこで、先生が日本のバキュリテス類を研究することになりました。先生は、北海道産の松本コレクションの無数のノジュールからバキュリテス類を剖出・整形し、さらに、双葉層群、和泉層群、二川層、鳥屋城層などを調査し、約150地点から総計1,000点に及ぶ標本を研究対象としました。先生は日本産バキュリテス科を調べ、7新種を含む25種を識別、記載しました。そして、11の化石帯を設立し、日本の上部白亜系の化石層序の精度を上げ、さらに各種の地理分布・系統や生活様式・堆積相との関係を論じ、昭和36年に理学博士の学位を取得されました。まさに、肉体労働の成果と先生語録の「自然から教えて貰い」、「基本問題の解決」、「王道研究」でした。

昭和37年に、文部省は国立科学博物館に自然史研究センターとしての機能を持たせることになり、先生は科博に招かれました。以後、平成6年に地学研究部長として退官されるまでの32年間、研究と社会教育に携わってこられました。先生は、科博が社会教育機関と研究センターであることの二面性を持つことから、2つの方針を立てました。第一の社会教育では、恐竜などをテーマに大規模な普及活動を展開しました。日本で最初の恐竜骨格の組み立て、双葉層群からの首長竜の発掘と展示、中国の恐竜、イグアノドン、マイアサウラなどの特別展覧会を成功させ、科博の社会教育機関としての位置を確固たるものとししました。この間、先生には、恐竜の一般向けの本などの執筆が依頼され、教科書も含めて200編ほどの著書が出版されました。「恐竜の小島先生」として、先生は知られ、若い古生物学者の中にも子どもの頃先生の本を読んで恐竜研究を目指したと聞きます。まさに、先生は日本における恐竜ブームを起こしたのです。先生語録の「転職により求められる発想の転換」、「勤務先で置かれた立場」、「専門研究ともう一つ」、「転んでもただで起きるな」を身をもって示したのです。

日本で初めての恐竜足跡の発見もイグアノドンの特別

展覧会がもたらしました。私の学位取得後の昭和59年4月、先生との昼食時、先生は明年予定されているベルギーのイグアノドンの展覧会の話がされた際、「日本からの恐竜で展示ができれば良いのだが」との相談を持ちかけました。私は、その時、山中白亜系の群馬県中里村（現 神流町）の漣岩にある2つの不思議な穴が、恐竜の足跡であるとの冗談とも取れる話を聞いたことを瞬時に思い出しました。そして、次の日、現地に行ってみると2つの穴以外にも沢山の凹みがあるのにビックリしました。博士研究のため、この壁の前を数え切れないほど通過していたのに、自分の目は節穴だった。それから、研究を開始し論文を出版しました。私は、この研究を通して、科学の発見の過程の面白さを体験しました。さらに、先生は米国で開催される恐竜の足跡のシンポジウムで発表することも提案されました。参加してみると今日までつき合うことになるDr. Martin LockleyやDr. Niall Mateerらと知り合うことになり、外国という新しい扉を開いて頂きました。先生語録の「研究しながら勉強する」、「専門研究ともう一つ」、「古生物学を教えた」、「柔軟に」、「転んでもただで起きるな」でした。

第二の研究面では、アンモナイトの系統分類と進化の研究に関して、先生は、北海道産の保存の良い上部白亜系のアンモナイトを基に、生物学的古生物学の研究を進めました。多くの共同研究者等と電頭での観察や現生オウムガイとの比較からアンモナイトを生物学的に研究しました。卒論や修論で、斬新な切り口で研究を進めた経験からと思われまふ。先生語録の「片鱗」、「柔軟に」がなした結果です。先生は、これら一連の「白亜紀アンモナイトの研究」により、昭和51年に日本古生物学会学術賞を受賞されています。

また、先生は日本の下部白亜系の国際対比にも力を注がれました。当時は、下部白亜系の時代論がほとんど手付かずの状態で放置されていました。まず、下部白亜系宮古層群の研究に取り組みました。*Valdedorsella*属の3種、新属*Miyakoceras*の提唱と2新種を含む3種、*Eodouvilleiceras*属の2種、*Douvilleiceras*属の1種の記載が古生物学会誌の学術報告記事から3つの論文に分けて出版されました（昭和41年～44年）。いずれも、詳細で、論理的で、かつ無駄なく記載されており、化石標本や化石種を記載する上でのお手本になる論文の1つにあげられます。その後も、7編の記載論文が出版され、記載論文として最後となる11編目の完成直前でご逝去されました。この論文は共同研究者の私が先生の御遺志を受け継いで出版する予定です。また、銚子、紀伊、山中などの下部白亜系は、東京周辺の大学生の卒論などを指導しながら学生と一緒に研究を進めました。私も東京学芸大学の修論として山中白亜系の研究で、先生にアンモナイトの鑑定をお願いしたことから先生のプロジェクトに加えて頂きました。なお、私は、その後、先生からご指導頂

き、プロの古生物学者として道を歩み、山中白亜系の研究で理学博士の学位を取得することができました。学位取得に関して、私はストレスを感じましたが、先生から学位取得後は、桃源郷が待っているとの励ましからこの苦境を乗り切ることができました。その後の、私の研究の発展を振り返ると、桃源郷が有り、先生語録の「博士学位を取得する時の苦労は肥やしになる」でした。

先生の下部白亜系のアンモナイトの研究は、その後、銚子、山中、紀伊、勝浦川、フィリピンのアンモナイトの記載と動物群を論じた論文を私と共同で出版し、前期白亜紀の日本周辺のアンモナイトの分布が当時の海流分布を反映していることを述べて、当時の海流分布を世界で初めて図示しました。また、当時の日本はアジア大陸の東縁に位置していたことを初めて述べ、古地理図も示しました。日本の前期白亜紀アンモナイトの記載分類学的研究の完成が近づいたので、日本の前期白亜紀アンモナイトの化石層序や古生物地理の論文出版を相談している中での先生のご逝去でした。

先生は、長らく日本古生物学会の評議員・常務委員として努められ、学会をリードしました。特に、庶務担当

の先生の行政手腕が高く評価されました。これは、科博が教育支援事業に大きく舵を切り、地学研究部長としての先生の行政手腕が発揮された同時期でもありました。このほか、日本地質学会で評議員・執行委員・編集委員、日本学術会議での各種委員、文部省学術審議会専門委員など数多くの委員会の委員も務められました。

私は、若い時に小島郁生先生という優れた師に巡り会うという千載一遇の機会を得ました。そして、先生から自分の知らない才能を引き出して頂き、研究生生活で人生を送ることができ、非常に幸運な運命に感謝しています。私は、先生の「最近の遺伝子細胞学で人間の寿命が120年から140年と云っていることから120年を目標に研究を続ける積もり」との御意志を受け継ぎ、研究し続けることが、先生の御恩に報いる供養に違いないと思っています。

最後に、小島先生のこれまでの古生物学研究への貢献とご業績に敬意を表し、長年にわたりご指導頂きましたことに御礼申し上げます。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

